

令和6年度

名古屋大学大学院情報学研究科 心理・認知科学専攻 入学試験問題（専門）

令和5年8月2日

注意事項

1. 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開いてはならない。
2. 試験終了まで退出できない。
3. 辞書の持ち込みは認めない。
4. 日本語または英語で解答すること。
5. 問題冊子、解答用紙1枚、草稿用紙1枚が配布されていることを確認すること。
6. 設問A～Fまでの1つを選択して解答すること。なお、選択した設問記号を解答用紙の指定欄に記入すること。
7. 全ての解答用紙の所定の欄に受験番号を必ず記入すること。解答用紙に受験者の氏名を記入してはならない。
8. 解答用紙に書ききれない場合は、裏面を使用してもよい。ただし、裏面を使用した場合は、その旨、解答用紙表面右下に明記すること。
9. 解答用紙は試験終了後に提出すること。
10. 問題冊子、草稿用紙は試験終了後に持ち帰ること。

設問 A

(問1) 人間の問題解決 (problem solving) においては、様々な戦略 (strategy) が用いられる。以下の2つについて、それぞれ説明しなさい。

- (1) 差縮小法 (difference reduction method)
- (2) 手段-目標分析 (means-ends analysis)

(問2) 人間の作業記憶 (working memory) について、以下の問いに答えなさい。

- (1) 音韻ループ (phonological loop) と視空間スケッチパッド (visual-spatial sketchpad) について説明しなさい。
- (2) 自由再生実験 (free-recall experiment) における初頭効果 (primacy effect) と新近効果 (recency effect) について説明し、なぜ、それらが生まれるのかを説明しなさい。

設問 B

次の問題 1. 2. に解答せよ。

1. 次の文章の空欄（ア）～（シ）に入る適切な語句を、次の A から P のなかから選んで解答せよ。解答は問題文中の空欄の記号とそれに対応する解答のアルファベットを対にして記述すること。

【解答候補】

A. 明るさ； B. P 錐体； C. M 錐体； D. 三色説； E. L 錐体； F. 彩度（鮮やかさ）； G. 反対色説； H. 錐体； I. 補色； J. 反対色； K. N 錐体； L. 加法混色； M. S 錐体； N. 減法混色； O. 桿体； P. 色相；

【問題文】

網膜（retina）に到達した光は、受容器細胞（receptor cell）を通じて情報が脳に伝えられる。受容器細胞には、弱い強度で作動し、色のない低解像度（resolution）の感覚を生じる（ア）と、高い強度に反応し、色のついた高解像度の感覚を生じる（イ）の二種類がある。（イ）には、受容する光の波長によって異なる色を表現する。おもに緑と黄の波長領域（wavelength region）に強く反応する（ウ）、赤の領域に強く反応する（エ）、青の領域に強く反応する（オ）の三種類がある。色を見るという主観的な経験に言及するために、色の経験を（カ）、（キ）、（ク）の三つの次元で体制化することがある。（カ）は、色のついた表面から反射されているように見える光の量のこと、その両極に白と黒がある。（キ）は色の純度（purity）のことをいい、深紅色のようなまったく飽和（saturation）しない色や、桃色のように赤と白の混合のように見える違いを区別する。（ク）は、赤や緑がかった黄色のように、色の名前によってもっともよく記述される性質のことである。テレビ画面のように、小さな点が互いに接近するために網膜上の像が重なり合うことで生じる混色（color mixture）を（ケ）という。

色覚に関する理論のうち、（コ）~~見えることを~~を説明するのは（サ）である。（サ）は、
~~見えることを~~

(ウ) (エ) (オ) のうち二つの (シ) が提示されることで白を知覚すると考える。

2. 暗順応 (dark adaptation) の性質を、「暗順応曲線」 (dark adaptation curve) と「順応時間」 (adaptation time) という二つの用語を用いて 400 文字程度で説明せよ。

設問 C

次の問い全てに答えなさい。

1. 内受容感覚 (interoception) とは何であることを説明しなさい。
2. 内受容感覚の正確さを行動的に測定する方法として、心拍カウント課題と心拍弁別課題がある。これらの方法について説明し、それらの方法が含む問題点についても述べなさい。
3. 内受容感覚は感情と関連すると主張されている。具体的な研究例を少なくとも 1 つ挙げた上で、内受容感覚と感情にどのような関連があるのか、それはどのような理論的観点から説明されるのか、について述べなさい。

設問 D

以下の (1)~(3) に日本語で回答してください。

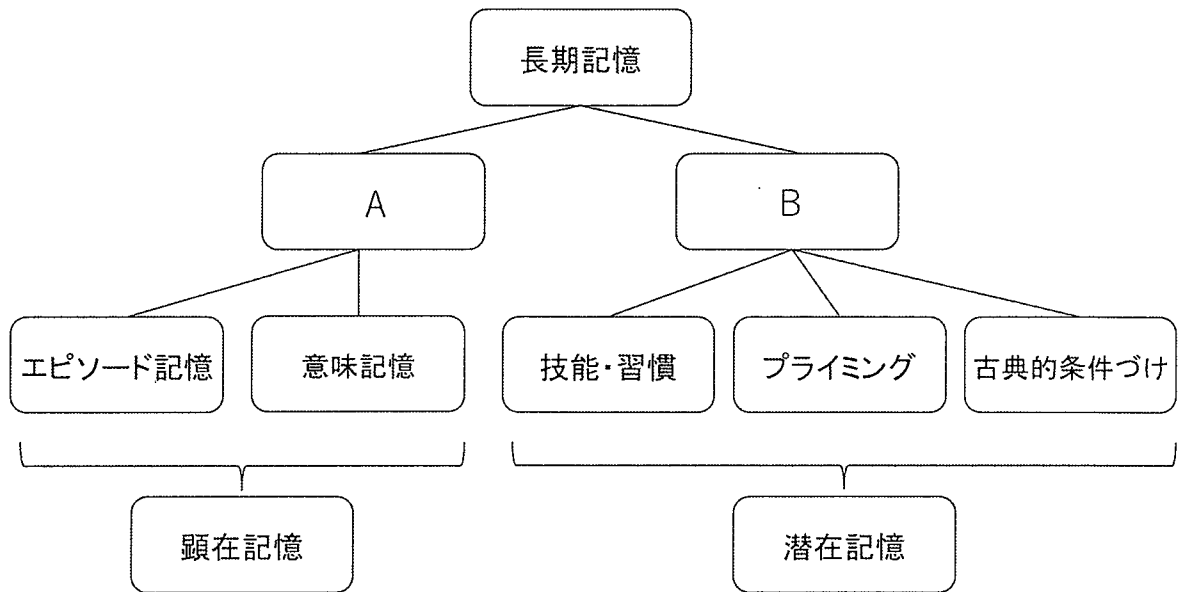
- (1) 研究例を 1 つ挙げながら、心理傾向の文化差や地域差 (cultural and regional variations in psychological tendencies) を理解する上で過去の社会生態学的環境 (socio-ecological environments in the past) や歴史 (history) に着目することの意義を説明してください。
- (2) 以下の a~c それぞれに対して、関連する研究内容について触れながら、その概念を説明してください。
 - a. 自己高揚バイアス (self-enhancement bias)
 - b. 情動的影響と規範的影響 (informational and normative influences)
 - c. 根本的帰属のエラー (fundamental attribution error) (または、対応バイアス [correspondence bias])
- (3) 以下の英文は、Liu らによる論文 (Liu, S. S., Morris, M. W., Talhelm, T., & Yang, Q. [2019]. Ingroup vigilance in collectivistic cultures. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 116(29), 14538-14546.) から引用したものです。これを読み、以下の問いに答えてください。

Collectivistic cultures have been characterized as having harmonious, cooperative ingroup relationships. However, we find evidence that people in collectivistic cultures are more vigilant toward ingroup members, mindful of their possible unethical intentions. Study 1 found that Chinese participants were more vigilant than Americans in within-group competitions, anticipating more unethical behaviors from their peers. Study 2 replicated this finding by comparing areas within China, finding that people from China's collectivistic rice-farming regions exhibit greater ingroup vigilance than people from the less collectivistic wheat-farming regions. The rice/wheat difference was mediated by greater perceived within-group competition. Study 3 found that Chinese participants were more likely than Americans to interpret a peer's friendly behavior as sabotage in disguise. We also manipulated within-group competition and found that it increased ingroup vigilance in both cultures. Finally, study 3 identified two boundary conditions where cultural differences in ingroup vigilance decrease: an unambiguously competitive win-lose situation where Americans also exhibit vigilance, and an unambiguously cooperative win-win situation where Chinese participants relax their vigilance. This research contributes to a more balanced view of collectivism, revealing its interpersonal tensions in the forms of within-group competition and ingroup vigilance.

- a. Liu らが注目し見出したことを日本語で3行程度に簡潔にまとめてください。
- b. なぜStudy 3において下線部で示した点を検討したのか、理由を説明してください。

設問 E

下の図は、Squire & Zola-Morgan (1991) の長期記憶 (long-term memory) の分類を表したものである。以下の全ての問いに答えなさい。



※図は Squire & Zola-Morgan (1991) を改編

- (1) 図の中の A および B に入る記憶の種類を答えなさい。
- (2) 「エピソード記憶 (episodic memory)」と「意味記憶 (semantic memory)」にはどのような違いがあるかを具体的に説明しなさい。
- (3) 「顕在記憶 (explicit memory)」と「潜在記憶 (implicit memory)」にはどのような違いがあるかを具体的に説明しなさい。

設問 F

以下の問い全てに日本語あるいは英語で回答しなさい。

- (1) 認知的共感にんちてきききょうかんと情動的共感じょうどうてきききょうかんについて説明しなさい。

Explain cognitive empathy and emotional/affective empathy.

- (2) 他者の感情の理解に自己の身体感覚処理が関わりとされる理由について、具体的な研究例をあげながら詳細に説明しなさい。

Explain in detail how the processing of self-bodily sensations is involved in understanding others' emotional states, giving specific research examples.

- (3) 共感ききょうかんの過程で、無意識的むいしきてきに相手と同じ表情を表出する反応が見られることがある。実験室における研究において、そのような表情反応ひょうじょうはんのうを計測する方法を二つあげ、それぞれのメリットとデメリットについて記述しなさい。

In the process of empathy, people sometimes unconsciously match their facial expressions with others. Describe two examples to measure the facial reactions within the laboratory environment, highlighting the advantages and disadvantages inherent in each method.